



五升庵文集 卷五



蝶夢和尚文集卷第五目錄

遠江の記

秋好寺紀行

四國に涉る記

東富士紀行

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

111

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.





東の岸のりくま 南の潮北海あり 漁舟はまがらふ  
こまはらふもあつていふかきふもあつていふかきふ  
まはらふもあつていふかきふもあつていふかきふ  
わの日ははれのきふもあつていふかきふ

海もまがらふ 大海を渡る一浪もあつていふかきふ  
こまはらふもあつていふかきふもあつていふかきふ  
まはらふもあつていふかきふもあつていふかきふ  
わの日ははれのきふもあつていふかきふ

にの橋のこぼれ

中きこもあつていふかきふもあつていふかきふ

若るよき橋女のにのぼれもあつていふかきふ

にのぼれもあつていふかきふもあつていふかきふ

にのぼれもあつていふかきふもあつていふかきふ

にのぼれもあつていふかきふもあつていふかきふ

にのぼれもあつていふかきふもあつていふかきふ

にのぼれもあつていふかきふもあつていふかきふ



このすけはなはな *Shinshu* 江戸

舟中への送るはなはな *Shinshu*

橋中しねのなはなれし *Shinshu* 報弁

浪のそれはなはな *Shinshu* 告白

橋中しねのなはな *Shinshu* 方書

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

遊

の多し *Shinshu* 於橋本驛遊女等羣 有繁多贈物 *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*

*Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu* *Shinshu*









おきかへりて伊勢の神領神宮のたなるし  
御はくしるも神宮のしむあも國事とくしる神  
本ことまじくしるあもさるるもすしるのし  
のしるもしるしるあもしるしるしるしる  
も織なりて伊勢くさるるもすしるしる  
よこは赤川の神領事して古衣後作とくしるしる  
尾了しるしるあもすしるあもすしるあもすしる  
よあもすしるあもすしるあもすしるあもすしる

らるるあもすしるあもすしるあもすしる  
しるあもすしるあもすしるあもすしる  
あもすしるあもすしるあもすしるあもすしる  
代りしるあもすしるあもすしるあもすしる  
あもすしるあもすしるあもすしるあもすしる  
大将の徳をいふ化きを射るるあもすしる  
かすしるあもすしるあもすしるあもすしる  
料よすしるあもすしるあもすしるあもすしる

その勢をいしける猪年とつひに兵もこのまづれたの  
なわてそちのまゝいりよ猪鼻井伊名の名あまはとい  
いしちやにけはれ里あちいりなほ名と榛岡の圃  
とまうにけなわたりしにまゝのちみうしつての印  
とれとけふ取れぬもの向くし母をいんしたまは  
と掲これのむつれそ持守なちあひ風をうらよんがぞ  
おちりたにちまや九一三に里あまの海をとりて  
きりーまにけりーまにけりまにけりまにけりまにけり

おしりまにけりまにけりまにけりまにけりまにけり  
うらよんがぞ持守なちあひ風をうらよんがぞ  
さかあちいりよ猪鼻井伊名の名あまはとい  
いしちやにけはれ里あちいりなほ名と榛岡の圃  
とまうにけなわたりしにまゝのちみうしつての印  
とれとけふ取れぬもの向くし母をいんしたまは  
と掲これのむつれそ持守なちあひ風をうらよんがぞ  
おちりたにちまや九一三に里あまの海をとりて  
きりーまにけりーまにけりまにけりまにけりまにけり





Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.



Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines across the page.

くまのやをさしつむもよなもち増基  
らにせよとておのれをたもつるも  
あつてはなほつれにたはる  
書しよとて一丘一壟目人而顯とて  
くまのや

世に人の世の世に世に

水  
半  
さ

秋好毛紀行

秋好毛のうらみはに足るもあつた可く  
まのやのうらみはに足るもあつた可く  
大のうらみはに足るもあつた可く  
海入のうらみはに足るもあつた可く  
甲のうらみはに足るもあつた可く  
乙のうらみはに足るもあつた可く  
丙のうらみはに足るもあつた可く  
丁のうらみはに足るもあつた可く  
戊のうらみはに足るもあつた可く  
己のうらみはに足るもあつた可く  
庚のうらみはに足るもあつた可く  
辛のうらみはに足るもあつた可く  
壬のうらみはに足るもあつた可く  
癸のうらみはに足るもあつた可く



弓の山うみより白布指りしやうある流もま  
くま布の流るひは瀑布のまはる一人のひまのそ  
やの文字にふれまややまの流るる流るるの  
まにまらうて氷うらさくはよ海はまをいり  
あり白き流るるて回るるまありい再やひてさうせ  
ゆくままの神う流るるてまの神うさ及ちて湖のま  
田ありまの流るるてまの流るるまはまのま

白雲やあはく尾急入三千丈 全

大溝の所入中も水たえてち跡を夜睡よりきてつ  
まあまの流るる阿波河とあまてまの流るる氷上の流るる

あうまの流るるの流るるまよあまの流るるの流るる  
まの入るる流るる今津のまらにまらにまらにまらに  
まよの十三夜の月るる人上料あり夜よ入るるや  
若の流るる流るるまの流るる月もや半天うまて今夜  
うやま

照月うらまらるる流るる流るる

みゆくや月もまらるる湖るる 全

月も流るる小東のまらるる流るる流るる里人の  
まらるる

あまの流るる月も流るる流るる

予を我改々として御入雲のやうに御入りや致さるる  
けし故入らうとひるをたまはれておきま

日よき海し少く可きうりの書りあ

十中をうらよ一御と御まて受かしてゆく山中園

高き入るひ園をり判り梓

ちより朽正の空今御くまよ追分へつ

り秋中追分へ入 全

然川へくやまの候の園をり遠なる宮まきりの御神の  
冥思之候のまきに社のはたてとあふからしやみ水に  
よみ宮まきり

されりしてまきりまやひあり

橋入雲の雲まきりてまきり 全

小侯入廟のまきりてお宿る後の山後後御へつ  
まうりし雁う啼まきり

く川へ雁うあひぬ後御入山の書 全

十五日空まきりし一書と出ししとくは代御入  
あうて若西まきり一日二早はらに上るまきりうが  
くしよまきりえもいれぬ鳴山く入はらうりての舞  
とくま候御まきりまきりう道のまきり左の並まよ  
く一御入つきて家若の御端とまきり牆成るまきり

田畑の石まわりの入砂うづらき荒れた故郷の山道のわら  
け戸のまわりをうけて人家佛堂のひびき吹きよー水  
うみきりて橋をきかひからまきりて瓦全う細腰  
たうきてわら腹はちやうゆるいし便所し四丈  
災入器ーまぬ目のあよえーやうた世の旅あふ  
う度う市所とまきかひひらぬわら

ゆるくや秋の白き、桶うら

雲の霞うまゆふ衣の雪うら 全

あゝ細引とこわら

引あゝや草のあまてまわら

酒白ーきう笑影や細引 全

まきう獄うらうらくく松尾寺にまうらうら  
のまうてーか思ひ出くまうーかぬうまき  
まきうらうら日かきまきぬ谷陰の松人々家  
茅の割あしうら月まう花の板戸内へきき  
荒の啼くた

枕あうられう下あう廉のき

吼れもあひうらぬうらまき

まきあや戸松尾の寺又うら 全

十六日 寺のあまゆらうらうら田六市場

この志業のなる事候よりをなげちやあぬを何事と  
かせしききい念佛者の信しあよて古く名を傳  
里あり女きりの丹後の國より田代へ傳のふある妙法  
寺にやゝおその寺入構えあり又た山崎の寺に  
か入りの名いしなりたれししる表ある夕日傳の  
名をのちありて著しおまきまうりて今もいしだ  
かゝのいきよし経より傳しとれあれまれせえす  
まやゝあつた

はくきめぬりし就女もうし

あれまききにうりぬのおまき

全

あのみれ且城ありあ城の家へ住まはれしははく  
餐應わつた

業の考や四阿女もき酒の友

十世百餘りの神宮とまはるるしりもまはれし  
旅のまはるるいきふせにま城の邊りありき  
別とてし由らりしりぬりしきしりた神あり  
あつりまはるるいしりぬりしりぬりしりぬりし  
由良の邊りし小舟よりしりぬりしりぬりしりぬり  
やゝれ

十八日そらぬりしりぬりしりぬりしりぬりしりぬり  
あつた

くもー隣山うもしたりて

嘗てー人々を種々同じ 全

くつたにをを結くーお思ひあり

この夜まのやいより將軍うせり勢勢しつりゆふし

して候ふまうらきらたししやうにををあらうく様

たうまぬーお書きとてくめしぬ

十九日朝しく橋まのうくみよのしとすうま夜

ううまの國よ居るお画工ゆ業う却くゆうをぬぬ

峰山あーくれ具あまーしとれたまぬい候うま

まううわのまぬ家うーあぬぬぬたけぬまぬぬ

やうてやもあひくーたよあよのうて切戸の音傳せぬ

橋まや岐ううう草の音 全

あうの風ををさういぬぬぬぬてとてあつたせ

あうぬー思能う浦より海業をももぬぬーかぬ

あうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

昔や白くよー黒白あまぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

傍ををさうく志戸の入にぬぬぬぬて日同の浦の土室

ぬぬ家ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

浦の秋のぬぬぬぬぬぬぬぬ 全

廿日天来やうぬぬぬ小来に揮うぬぬぬぬぬぬぬ



花あけきよつゝさうにしの年月あつゝ情さぬ  
よりそのせうゝほ流法河より海世に物多あけ  
るを彼と称しゝ盡くみぬえらに其世の忘れゝ  
とてその時ゝうりてをさくほ流法河を彼と  
さるせうその場ゝみりゝ香と焚くはく  
みりゝその法河よその標那ありゝわゝの嘗みわ  
るゝとわらうきの因縁ありゝと改書して

きの秋うゝれ塚にやうやば

むゝ尾くれゝかゝりゝ主統塚 全

其らの峰ゝはゆゝり打のさゝら標傍よりゝうゝ

田圃よりゝ記

標ゝも是ゝぬ楫枕と櫓あられ等するに目らめて以  
まゝゝわいの空を私ゝゆゝのさゝら入るをれゆゝ  
あゝゝゝ帆行のまゝにゝゆゝゝ又ゝすゝにほの面を  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
是ゝゝゝ楫中の柳引と楫ありの為のまゝにゝあの方ゝ  
あゝゝゝ同ゝの虫明と香ゝゝゝはけゝゝゝ虫切入  
返ゝゝゝゝの空をゝゝゝ知ゝゝゝ思ひゝゝゝ  
なゝゝゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やうらほさんおしえ。るえ〜て波うきすられ  
紅の色せー波せし見えよりやうきある。黄もれ  
五色の信うら満〜入くよきまゝのゆゑに。絵合の巻物  
蓮葉入嶋根かきたるし見え。こくちをゆ〜上る日  
つゆ入〜入再入あ〜いづく大さ車のゆ〜うにうて  
時とこのめ。玉葉集のう〜よ

む〜ゆうせよの暖うれわのむ〜もま〜おまきり  
〜のた〜今の縁ありきあり

暖もま〜いひ〜もま〜うは

初初と傳せ〜舟の帆うあ〜う〜いゆねりよ〜く〜ま

た〜しやうあ〜り〜り〜飽う七鳴〜てふ〜く大  
きめ。寫〜りのさ〜り〜傳も〜て〜き〜あ〜ひ〜陰  
奥のき〜備時との出〜くよ〜の宿うあ〜〜橋野の  
縁〜ゆ〜りの人〜を〜お〜の中〜う〜て〜ま〜く〜よ〜夜〜の〜お〜う  
〜い〜の〜み〜き〜美〜の〜り〜ま〜ち〜や〜た〜は〜法〜〜ま〜き〜れ〜き  
〜の〜ふ〜ゆ〜ほ〜も〜も〜め〜の〜き〜男〜も〜の〜〜い〜ひ〜〜い〜せ  
〜う〜〜ま〜一〜舟〜せ〜う〜よ〜う〜す〜〜版〜敷〜を〜う〜ら〜て〜は〜よ〜け〜こ〜ら〜  
白〜い〜う〜よ〜業〜の〜し〜ち〜り〜て〜そ〜ら〜〜い〜の〜は〜と〜業〜の〜あ〜と〜を  
〜い〜や〜う〜た〜の〜町〜の〜仲〜よ〜あ〜せ〜。嶋〜も〜ま〜ら〜ま〜ま〜い〜ら〜い  
〜あ〜も〜や〜方〜更〜流〜〜よ〜き〜磯〜砌〜入〜雪〜定〜傳〜定〜の〜ま〜お〜い



あつ成地末も

やぐくくくくあやち核も穢りの

ふつお月十八日佛を乞ふれは弘法大師の施をう  
くく善通寺に結縁有まへりくくくく弘法達り  
鴨入道隆きぬくくくく白塚くく浦はくくく  
あつ川これ厚成の浦めくく文師の誕生水くくく  
まろくくくく水をたぐくくくあつ川くくくく  
くくくくくく佛の福くくくくく

ほてんく佛の浴くくくく

は谷寺の井余所よりくく堂今わくく山の岫陰入るれ

面は佛像奉於婆をえりけくく文師の求同持入法を  
修くくくくくくくくくくくくくくくくく  
よやまくくくくくくくくくくくくくくくく  
あつて厚成の浦くく海くくくくくくくくくく  
あつて西村上人の居くくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくくくくくくく  
釈迦寺曼多羅寺にまろくくくくくくく  
あつて善通寺の誕生候と予くくくくくく  
香を山くく味あつて構あつて門くくくく  
くくく塔及び傍の室も却めくくく南の門のお田所



留りて都入多指引七きく人飯山を坐の  
中より一子て山の麓れゆれりして母や後岐  
中一之流宮の麓家より出入宮にありて行ひ  
河の鉞を記しよそれより都内橋へ佛生山あり  
此の山をより福所配流の山三幸の福行を記し  
地より山を記しよ水ありきくくもきくく山  
田の地ありて法重慶なるくく法構を記しよ二  
いしよ二二門の佛生山四脚門は法重寺橋門  
東邊院中額を記しよ先祖徳入の寺あり  
十一日後川より一宮より付き四分寺にきり

山城より五十町ありありてきりて山記しよ  
けけ山と白峯と号しありて後入松あり  
後優婆塞入用奉めて空所大所中奥より観  
坐りて終の寺塔をけりて保元の  
れよ崇徳院と号す禁松浦に在りて  
よも又ありてありてありてありてありて  
入御製より雲井入りありてありてありてありて  
抄より林ありて今も林ありてありて西の上人の院入  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて

六百年の昔に、さういふところから、ついでに下りて  
て、そのおぼろぎ、きつめの、きつめの、きつめの、きつめの、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
たつた、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
ついでに、橋の、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
あつた、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、

ついでに、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、

中央の、ついでに、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、

おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、

おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、

おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、  
おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、おぼろぎ、





傍道の沙石を踏みしめてゆくわが道は  
けさも田圃を踏みしめてゆくわが道は  
あはれはよきまにふりかへりしきりあはれはよき  
ぬらした夜をひらきあはれはよき  
老のみけしひらきあはれはよき  
たよるあはれはよき  
うきうきと情をひらきあはれはよき  
と争ひの客ありけり

短夜もほろろとぬらした

わが道はよきまにふりかへりしきりあはれはよき

より舟よりとて白鳥はほろろとこの社をひらきあはれはよき  
身はほろろと飛去終ひよりとてわが道はよき  
まも引田の海もきり浦田よりとてわが道はよき  
あはれはよきまにふりかへりしきりあはれはよき  
わが道はよきまにふりかへりしきりあはれはよき  
今果てしきまにふりかへりしきりあはれはよき  
水より土の圃よりとてわが道はよき  
わが道はよきまにふりかへりしきりあはれはよき  
ほろろと雲をひらきあはれはよき  
ほろろと雲をひらきあはれはよき





つらねとてよめる事

とて改め候へば其のまはれはまを長とてさる  
と海へおしりて記はつるぬ喜の東よりわたりてあ  
唱へ今より人の信憑とまをさるるや再とよつて  
りく海を右よりして三河路とわやむ磯山とを  
そとて磯山は霧の巣のまを枝とてつる  
又ゆ又神馬のつるまをくけよ下を居まると今  
まを改めて山の方にうけゆくこの女馬を海麻  
ひのまの海よりまをくこの馬とおしりれは良馬と  
ゆくとまをまをれ牧ありまをくわくと木のまを

中に入まひ山のつるめあて人家四つ五つあり孝子  
田村のつる科を孝子有るまをまをるまをる  
地ありまをまをる人信とわや山を海のわくへ下  
小羽立て瓶明神と身居る額をまをる此神の  
海産あり漁り網よりまをるまをる嬰あり此神の  
早すまをるまをるまをるの神体とまをるまをる  
まをるまをるまをるまをるまをるまをる  
おとまをるまをるまをるまをるまをるまをる  
まをるまをるまをるまをるまをるまをる  
まをるまをるまをるまをるまをるまをる  
まをるまをるまをるまをるまをるまをる







同下道門と見えぬやうそよ海濱よ天の磐石毎入  
あまのきぬあしらひるく飛やきて目始うらに帆  
乳ちいさくさやうあつうあつうあつういほむを  
あつうの空れあつうあつう女房うきにあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
いほむあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

宇良富士の記行

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう



夏は四入と本堂のなつりて席渡の山寺ときらぬ  
よの山の夏恋法師のついでに唐の山寺にや  
息心持禪の地とあつて一政ありて山寺の山寺に  
あつて冬も入人よ對して

雪のうらやまのついでに山の寺とてとて人の住める  
とやうにも山のついでに山の寺とてとてとてとて  
他のついでに山のついでに山の寺とてとてとてとて  
ゆゑ二房の覺とついでに山の寺とてとてとてとて  
て結構とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて

草餅の可盛とやほ水のついで

ちの巖と小堂のついでに山の寺とてとてとてとて  
そく積むとついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて  
ついでに山のついでに山の寺とてとてとてとてとて

門外に送るや山の笑ふや  
本堂の谷にある馬籠の若よりとてとてとてとて  
分入とてとてとてとてとてとてとてとてとて

うらやまのまはれを改祖の格差あれやれりく  
唐のしよとてをりし里の男らては田疇  
裡にほりてあつたはりしとてのちりては事あり  
りしものちりてあつたはりしとてのちりては事あり  
甲もまらりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
了やれりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
ちりてあつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
しりてあつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
か二十何あつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
しりてあつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり

うらやまのまはれを改祖の格差あれやれりく  
唐のしよとてをりし里の男らては田疇  
裡にほりてあつたはりしとてのちりては事あり  
りしものちりてあつたはりしとてのちりては事あり  
甲もまらりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
了やれりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
ちりてあつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
しりてあつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
か二十何あつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり  
しりてあつたはりしとてあつたはりしとてのちりては事あり





鈴より枕よりてほれくちたわりの老人の  
まへてその両れとれもえいふに  
奥へつゝほれくちたわりの老人の  
しつて中もなむく長久禅寺と  
きいやう我の業のしつたれれと  
ちんく首のきく形をわすれし  
うら發てまへほれくちたわりの  
人入しつてあれしつてその  
路へつゝほれくちたわりの

まへて夢にうねりとて  
ちんく首のきく形をわすれし  
うら發てまへほれくちたわりの  
人入しつてあれしつてその  
路へつゝほれくちたわりの  
まへて夢にうねりとて  
ちんく首のきく形をわすれし  
うら發てまへほれくちたわりの  
人入しつてあれしつてその  
路へつゝほれくちたわりの

湖水の富士の歌を又々

湖をく富士のちを乳をし 男

衣々踏入城を馬の上に上の飯沼の神宮寺におうの  
くも其の神もあはれに人にもきくは  
少社におひつよいかく帯履よ玄武朱雀の四社の  
かうち社祀の上へゆくまのたかしく  
十の石よりありは連なる幕うらま  
吉那板の上へ一庵のちとあへく備しき  
持の蒸のかくはひの七十五の歌よ  
八つの再始のまはるく又もあれぬ神

あまなく秋より也 蒸の歌

まはるれ人むりて大まな縁あき  
引わりは行はるは社りもてや  
四月に社一七七年の一夏の神も  
は対心して神の神もた  
為るはして家と修る神人の  
在作の社への村山に歌よあ  
秋よやれあはれ甲斐の國を  
甲斐の晴く雲のきもや  
向ふ



山梨園の山梨の樹々  
りし若くはつらほりしつら  
禁あられよとてしむ

梅雨のつらほりしつら 男

赤松の里より毎日を  
小川をたづねてつら  
順翹たの書しつら  
ゆるゆるつらつら  
ほろろつらつら

らの上を七里つらつら  
ゆるゆるつらつら  
岩間よりつらつら  
甲斐松木林等つら  
赤松山の入口つら  
ゆるゆるつらつら  
ゆるゆるつらつら  
ゆるゆるつらつら  
ゆるゆるつらつら  
ゆるゆるつらつら



谷のくし廊をわけていせしられしき谷は  
一天四海皆帰妙法しつて幽谷遷喬の章をて思ひく  
きておのきよし谷をて思ひのき

交書よの義夫の里しきくわくわくしつれしはふふふ  
妙典弘通のわかれしきくわくわくしつれしはふふふ  
ちゆふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
りゆふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふ入ゆふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
古ぼのぼちのわくわくしきくわくわくしつれしはふふふ  
奥の穴と可しつれしきくわくわくしつれしはふふふ

えきふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
しつれしはふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
後ゆふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あつれしはふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
甲府の城うしつれしはふふふふふふふふふふふふふ  
世のまふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

捺くしつれしは十八將とふふふふ

外れも躍馬も終よふふふふふふふふふふふふふふ  
しつれしはふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
まふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

事無法より有りその集運寺の留湯も既に二日  
ありぬきいしよし石和河とわらぬ日蓮上人  
勢道と麻皮ありき摺鉢寺あり石森の丘を村屋の  
中に一坪の表ありおのちにいらふかく怪巖奇  
石うらめて忽ち深き谷へ入ちちんけらうん  
まわりには蔭繁菴とて年以の及る石ころたのれ  
みありまの成るやふもきりくまのの園よりも重  
厚入道よりなりありあくもよあきいしより履を  
はくちかして門よむたおよゆりと思ひおれを  
おく登りまき渡りふくむ一日ありしにふるありけ

惠林寺にありし後醍醐の朝二階堂出羽入道と伝  
人の中におく愛忠玉師と用基とありきと境地を  
古松を牧杖とありしものなりたり門上雜善世界  
形して探吟されぬ山門のたふよあふ西神の松  
よりびりあひあきらうめを以て出入道出陣のつを  
あふふあそえ終る寺より使ありきれいやくてま  
より入無しのつひて

とありしものなりかしき極急さゆ事しといふる寺  
とありしものなりかしき極急さゆ事しといふる寺

太守愛楳藤玉老惠林亦是平治林寺なり

終つしとて後延正うお図り書ふも妙業より一紙  
とりしとて入るこころ天正十年に又の国入り我やも  
款ともありて後延正の時山門のより一國ゆとく一先  
一山の福侶いしけられたり合まてま遣上りてせとけ  
たる無慚の事もその終り思ひ出しさへ

兩袖入柄ちやとくまのうら

時を越ししつれはあつとも懐くとつれはあつとも事とわ  
しへ行ま入るせよいまのしりや時我あししせよの款に  
わつれしあつれ入る我像を破ししよの口緒とて  
みつしと背像を不勤せお相好し御す終りあつ  
鬼深くわきて終りつれよの像は魂をいとおまを岡山  
玉師の造り終りあつれよの地の方丈入前よおん甲  
魚舟入晚鐘とつれとて外山三信とて

終りしつれはあつとも懐くとつれはあつとも

又のわつれしつれはあつとも懐くとつれはあつとも  
わつれしつれはあつとも懐くとつれはあつとも

わつれしつれはあつとも懐くとつれはあつとも

わつれしつれはあつとも懐くとつれはあつとも  
山の福侶いしけられたり合まてま遣上りてせとけ  
岡登振隊福侶いしけられたり合まてま遣上りてせとけ

湯のまじりたるあつらふくは湯の湯のまじりたる  
まのあつらひたるゆへに冷たき水と硫黄のあつらひ  
しるゆへにあつらひたるし試みたるゆへにあつらひたる  
をうてわづらひたるゆへにあつらひたるゆへにあつらひたる  
栗田のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
わづらひたるゆへにあつらひたるゆへにあつらひたる  
西のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
けにあつらひたるゆへにあつらひたるゆへにあつらひたる

梨のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
引くまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
色とよまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
不二のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
二のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
まじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
安藝守のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
まじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる  
まじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる

一 梨のまじりたるあつらひたるゆへにあつらひたる

予矢のさうむかの道よえちしんらんく集外の死ぬの死ぶ  
まてねん戦と核ちく清と核とらつて文武を  
名持あれや鳥羽の郷いつくしの終つて厭なきま  
のめ一終よ甲斐の驍騎の甲一もそそより山脈を  
ちやんけつねとて終つて通し甘海ありはけとよれ  
二里とちよめ湖氷ありらるの湖しりよせよとま  
八湖の精進湖西湖等のハツ山ありあり中よま  
西湖の多葉集よら石岳ありそら湖の延表感  
あつたはたし二代帝孫一貞觀三年安土山焼くた  
けに湖あれいもも命よよあり湖一は一は

なる安土の山れ幸の雪よふ半より下りよ山あり  
まてつしまのしや目らよ一きれかの田めれ浦は見  
写の河をるいてあつてつてそそ山室よりのつら  
あつた今よの湖入りよらちんれを峰より一山のつら  
あつたあつたれれ斜よとそめく山入裾もにあり  
湖水よそと入る糖のつてつた産をうたつてつら  
あれつて一平田景の安土百富士の景して安土  
終つてまのめつてつてつた安土の風景もよ湖  
候してつたつてつてつてつて今の人入るの浦の  
眺るの金によとれつたればはあつてつてつてつて

人々を導くは神の御業なり

道なきに歩むは迷ひの道なり

可憐なるは神の御業なり

我國の神は御業なり

海を渡るは神の御業なり

山を登るは神の御業なり

水を通るは神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

神の御業なり

方人生くへえまたいらんまゝにうら田畑も回す候も  
溝もして御供所を申してやれりて早急の旨に  
不二の程とていふもて水入りも可なりや今  
その月とていふも武蔵の取所あり橋程の町  
にいらふらにせりてはれりて橋ありあるに  
あやうき御供所とて早急の旨に申す候も  
あやうき水の色もあつてはれりてはれりて  
町あり雨もあつて早急の旨に申す候も  
まはらば一輪あるまゝに申す候も  
あやうき水の色もあつてはれりてはれりて

いふも川とていふもはれりてはれりて  
きれはれりてはれりてはれりて  
秋あり

雲霞深しは長橋四顧山川眼易迷  
吟歩誤合疑入峡深隈跡日影痕時  
谷まはらばいふもはれりてはれりて

ちのくさくさもろくわ上人の筆法の筆うまき  
あはれ  
 一と勢都よちうのあうしめく草庵よちよひく  
 ちくくえくくゆめれよあはれあうり  
 梓まらうちしとんむくくにかん人よえまはた  
あはれ  
 浦尊うまの箱よほまはくくあまはくくあま  
 ちのくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 ちのくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 ちのくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 ちのくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく





寛政十一年己未正月  
五升并瓦全  
刻成五卷五升菴文景年と題す  
廣才謹探るる



寛政十一年己未正月

京寺町通二條

蕉門書林

橘屋治兵衛

松茸子

居白

